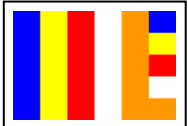


©山本宗補



# 龍族

नागा लोक

創刊号

南天会  
平成26年  
8月30日

## 南天会発足!

7月14日、東京四谷の真成院に世話人以下10名の人が集まり、佐々井秀嶺師を支援する会「南天会」が発足いたしました。

当会は、佐々井師ご自身の提案により、有志の関係者・支援者の賛同を得て立ち上がった、言うなれば佐々井秀嶺公式ファンクラブのような会です。佐々井師いわく、「私

のファンであるということは、私と

いう人間に対するファンではなく、私がこれまで歩んできた菩薩道のファンということであり、アンベードカル大菩薩、龍樹大菩薩、そして仏陀が歩まれた菩薩道のファンということであります。」

名称については、佐々井師提案の「南天竜宮城護持会」を約めて南天会としました。会費および支援金は、

インドにおける佐々井師の諸活動費用に使用されます。支援と同時に、佐々井上人の周知、関係者・支援者の交流を促進します。

佐々井師の日記やスクラップブック、写真、映像、蔵書などの資料を撮影、保存するプロジェクト、「佐々井秀嶺資料室」も、南天会に合流し、佐々井師及びインド仏教研究の基礎資料を構築します。

佐々井上人の活動に協力したい、佐々井上人のことを知りたい、佐々井上人の菩薩道を自分も歩きたい、そのような心があれば、宗教、国籍、思想信条に関係なくどなたでも入会できます。またこれまで支援されてきた方々には、是非ご連絡いただき、ご指導ご提案いただければ幸いです。事務局以下世話人等非力ではありますが、横道にそれぬよう菩薩道を行くつもりで精進してまいりたいと思います。

佐々井上人八〇歳の誕生日（満七九歳）遅ればせながら南天会、立ち上がりました。龍のごとく長い菩薩の道、先行く佐々井上人を追いかけて、まずは第一歩。

バンテージ・サイ・アゲボロ!  
(佐々井上人に続け!)

## 佐々井師一時危篤

南天会発足したばかりで、いきなり緊急事態が発生しました。

七月十四日、世話人会の後インドへ報告の電話をしたところ、ご本人の携帯電話がつかならず、不審に思い側近の運転手ゴータマ氏に連絡すると、ここ数日体調が悪く、ちょうどこの日ナグプール市内の病院へ入院されたということでした。同時に複数のインドの関係者から、日本の各支援者へ連絡が入り、危険な状態であることが分かりました。

食べ物や飲み物を受けつけず、点滴のみで体力が低下し、危機的な状況が続きました。インドからの情報は錯綜し、一時死亡説まで流れ、現地では佐々井師危篤の新聞記事まで出たようです。

当会関係者も状況を確認すると同時に、資料室のフェイスブックページでインドラ寺協会長アミット氏のメールを公開し、関係者・支援者の皆様に、回復の祈りをお願いしました。

この間、お弟子の宮本龍勝師がナグプールに入り、お粥などを持参して状況確認され、続いて八月二日、岡山長泉寺の宮本光研師、当会世話人の小林三旅氏がインドへ向かいました。二人がナグプールに到着したこの日を境



マハラシュトラ州首相のお見舞いを伝える新聞記事

に、体調はやや回復に向かい始め、前日より良い知らせが入ってくるようになりました。

しかしまだ容体は安定せず、マハラシュトラ州政府閣僚の計らいでムンバイの大きな病院へ転院され、月中旬には写真家の山本宗補氏がムンバイ入りし、食事の世話をしながら、写真と共に詳細な現状報告をされました。(山本氏のブログ「山本宗補の雑記帳」に掲載されています。)

約1カ月近くまともな食事が出来ず、一時は人工呼吸器をつけ意識も薄い状態から、徐々にではありますが力強く回復され、食事が取れるようになり、歩行訓練などされ、ついに退院となり、現在はナグプールに戻られています。月末にお弟子の高山龍智師がナグプール入りし、三十日の八十歳誕生日を無事ナグプールでお祝いされました。

まさしく必生の闘病で回復された

バンテージ。関係者皆安堵いたしました。しかしこのような体の不調は、また何時発生するかわかりません。医師によると、佐々井師の病気の一番の原因は、ご自身の活動に対する資金的な不安、またこれからの展開についての不安からくるプレッシャーであるそうです。そのような心配事を少しでも減らせるよう、南天会の活動も急がねばならないと感じました。

今後現地情報は、会報やホームページ、フェイスブック等で報告していきたいと思えます。また現地入りした方は是非、情報をお寄せください。



8月17日ムンバイの病院にて。ジャイ・ビーム！（山本宗補氏撮影）

以下、8月2日から6日までインドを訪問した宮本光研師、小林三旅氏の寄稿です。

## インドこころ旅

—佐々井秀嶺師をお見舞い—

五七五句 2014・8・156 沙門 光研

今日のトウキョウといふ壊れもの  
台風の太平洋上インド行く

まご大ちゃんまご爺さん行てきます

国際線なんきんまめを常食す

途中下車できぬアジア半月弧

飛行中「サイイのち」を思いおり

覚悟とは何？インド路へ向かいつつ

五十年その汗、涙のインドかな

在インド五十年ことほぎたてまつる

いくたびも起こせし奇跡今も又

インド着

わが職は「リタイアメント」到着ビザ

はるばると南天竜宮城へ着く

サイイなる希望の星が南天に

未来際尽くすまで生き、死すなかれ

病床のお見舞い

死の淵の誘引ありしかサイイ・ジー

不世出岡山に生りてインド涯つ

破天荒われも一役かいにけり

サイイから稟けし恩恵「きぼう」なり  
動乱のインド天気模様かな

これからのインド仏教指導者よ

「後継者誰なんですかサイイさん」

若さらに期待すはなし宙に浮く

ブダガヤの奪還闘争つづかばや

おいたち

風雲児新見の山から起きにけり

かの平氏怨みの海はインドまで

龍宮を夢見し太郎がサイイかな

空海の夢届きしやナグプール

山際(素男)の作家魂あらばこそ

満月の夜煌々と龍樹かな

見るべきは見、為すべきは為しなほ生きて

密教のいのち掘りあてしサイイかな

マンサルの空「たましい」が翔けめぐる

必生のサイイの祈りつづかばや

さらに生きて人間解放果たしたし

すなわち人類成仏をこそ

サイイその生命に替へて樹てしもの

インド管見

ゴンドワナなりし頃より秘密教

ゆつくりとインドは回る紙芝居

アンベドカル教 膨くれるインドとか

ナーガローカ在家仏教ナグプール

ベンガルに存る比丘ビナーヤ・キタ

密教が何とぞ解つたらインドかな

密教の到達点やササイ立つ

ササイ門下俊秀幾多ありにけり  
生きてゆくことだ地球亡ぶとも

ニューデリー

風雲急告げる龍城ナグプール

GOINDIGONAGプール便らしき貌  
ぼんのうのかたまりと言へ孫抱かむ

生まれ生まれ生まれ生まれてその始め  
死に死に死んで死のおわりになお暗し

空海のインド風なる『住心論』

小林三旅氏

初旅や映像作家三旅氏と

三旅氏や『男一代菩薩道』

カメラマン銃器の如きささげもつ  
わが語る仏教うわごとそらごとか

二人旅こころの言語化・映像化

瀬戸際の島国日本へ帰りつく

玄関に不動明王成田山

日本は優しき国かどう猛か

インド行きいろはにほへと老いぬるを  
清(すが)しさを欲得離れ生きむかな

原発とたたかいつづく日々ならむ

お見舞いのインドの天地五七五

ともかくも「無事」に帰らむ句百首

(抄)

## ナグプール短信

小林三旅

7月末の佐々井師の危篤に際して一部で亡くなられたという誤報が流れ、日本の関係者も情報が混乱するなか、宮本光研師は「この目で状況を確認したい」と、急遽の涉印を決断されました。私も同じ日の涉印の準備をしていたことから、案内役として光研師の道中のお世話をすることになりました。70を過ぎて単身ナグプールに向かおうとされていたのですから、相当地な覚悟があったと思われれます。ビザも取得していなかったため、多少リスクのある到着ビザをデリーの空港で取得しました。その時私が、職業を僭侶にすると申請で何か問題が起こる可能性もあるかも知れないと思い、ご隠居的な意味合いでリタイアメントにしたらいかがでしょうか、という意見をしましてそれが俳句になっております。ご自身の肩書きをそうしたのは初めてのことなのではないでしょうか。ビザはすぐにおりました。そのまゝ、国内線にとびのりその日のうちにナグプールに到着しました。

空港では、インドラ寺の会長アミット氏が出迎えてくれ、ホテルに荷物をおきすぐに佐々井師が入院している「ケアホスピタル」に向かいました。

病院の入り口には佐々井師を心配して集まったお坊さんや仏教徒が集まっていた。しかしICUにいる佐々井師はそのときまだ面会謝絶の状態で、みな、どうなるともわからない中、心配そうな顔でそこにいることしかできないようでした。実際ナグプールでも情報が錯綜し、死亡情報もかなり飛び交ったようでした。私たちは特別、病室の前まで、行く事ができ、佐々井師の様子を1分ほど伺うことができました。そのとき見た印象は相当悪く、顔はやつれ、鼻に管をとおり口をひらいて息をしており、まだ危篤を脱していないという印象を受けました。光研師も私には驚かれたように見え、声もかけることもなくただ立ち尽くしていました。しかし、皆さんの説明では私たちが来る前よりも快方に向かっているとのこと、また直接様子を伺うことができたこともあって少し不安が解けたような気がしました。

翌日午前中に伺うと、確かに容態は良くなっているようで、面会時間をもたうことができました。そのときは鼻のチューブは抜け、ベッドをおこして、話しかけることができました。声は力がでないようで聞き取れませんが、目も耳もしっかり聞こえている

ようで、この時回復を確信しました。

翌日は、医師団の会見を撮影することができました。容態の経過を伺いますと、最初は別の病院に下痢がとまらず担ぎ込まれたが有効な治療がされず、肺炎を発症、この時にこのケアホスピタルに勤務する仏教徒の医師が危機を感じこちらに転院、その直後に危篤状態におちいったとのこと、まさに間一髪で救われたという印象でした。このケアホスピタルでは5人の医師により総合的な治療を受け回復が早まったようです。今回の症状は緊急なものというより、持病が合併していたことが原因だったようで、糖尿病と皮膚のかゆみどめのためのステロイドが原因で下痢止めが効かなくなつたこと、それと結核がきちんと治療さ



れていなかったようで、長期的な療養をすれば治療は可能とのことでした。この会見でまた元氣になったときに改めて話ができるという安心を得て、私たちは帰国を決めました。

今回、宿の手配をアミット氏にしていた。3泊ほど、光研師と相部屋をさせていただき、佐々井師についてお互いの意見を多く交換することができました。また、会話というよりも、光研師の思考の中に飛び込むようなたくさんの語りの中で、すぐに即答できず、長く腑に残しつづけなければならぬ多くのヒントを頂いたように思います。お話を伺った中で一つ思いを強くしたのは、仏教はもって世界で一つにまとまったほうが良いという考えが以前からある反面、土着し文化と融合したそれぞれの仏教もまた優れた仏教の姿であるということでした。佐々井師の周りに集まる日本人のお坊さんは個性派集団で、魅力的な方々ばかりだと思えます。その含蓄ある深いお話に、私の頭が追いつかないこともありましたが、光研師はその中でも特別に芯が太く鋭い方のように思いました。私も南天会の世話人として、先輩方の意見を多めに参考にしながら会に貢献できたらと思っております。

そも、佐々井秀嶺とは誰ぞ！

### 佐々井上人紹介文

※当会世話人一心念誦堂佐伯隆快の文章より転載します。

### 菩薩道ここにあり

#### 佐々井秀嶺上人とインド仏教徒

3000年の長きにわたり、ヒンズー教の教えにより不可触民の呼び名のもとあらゆる迫害を受けてきたインドの最下層の人々。街から追われ劣悪な土地に住し、汚物処理や死体処理、軍隊などの人から忌避される職業を代々世襲させられ、ヒンズーの寺院への立ち入りを禁ぜられ、飲み水さえも与えられない。果ては盗賊となって野山に隠れ暮らすまで追い込まれる。全人口の四分の一、日本人の数倍に匹敵する人々が、このような苛酷な状況に置かれ続けてきた。

近代イギリスのインド統治下でもこの不可触民の状況は変わらなかつた。ガンディー率いる国民会議派がインド独立の非暴力不服従運動に邁進する中にも、そのもとも苦しみを味わっている不可触民のことは話に上がる程度で、ほとんど無視されている状態であった。

この不可触民の中から、彗星のごとくに立ち上がり、一気に不可触民制廢

止を謳うインド憲法制定まで突き進んだのが、B・R・アンベードカル博士であった。

アンベードカルは、自らが不可触民階級の出身で、克苦勤励して勉学を修め、彼の聡明を期待する人々の支援を受けてアメリカ、イギリスに留学し、依然として様々な差別を受けながらも、法律、政治、哲学などの分野でインドを代表する人物となっていた。

その間、常に自らを不可触民代表と任じ、その心を不可触民と共にし、貯水池解放運動、ヒンズー寺院立ち入り運動などを率いた。また、ヒンズーイズムに固執するあまり不可触民の解放に積極的でないガンディーと度々対立し、インド独立の影で無視されようとしている不可触民の強力な声となった。

そしてついにインド初代法務大臣に就任し、ほとんど一人で起草したインド憲法において、不可触民の解放を高らかに宣言したのである。

さらにアンベードカルは、自分たちを苦しめるものでしかないヒンズー教に対し、その階級思考、迷信性を厳しく批判し、ヒンズー教からの改宗を宣言する。アンベードカルが選んだのは、自由、平等、友愛の民主主義思想に根差した、人間存在、社会、自然の

理に適ったブッダの教えであった。

1956年10月14日、インドの中央に位置するマハラシュトラ州第二の都市ナグプールに於いて、アンベードカルは50万人の不可触民と共に仏教に改宗した。これは人類史上稀にみる劇的快挙である。3000年虐げられてきた人々が、自らの力で暴力に依らず自由を勝ち取った瞬間であった。

ところが、それより2か月後の12月6日、アンベードカルは長年の無理がたたり、突如としてこの世を去る。生まれたばかりの50万仏教徒は、偉



大なる父を失い、文字通り途方に暮れるのであった。それでも、アンベードカルがその死の直前まで目を通して書き上げた名著『ブッダとそのダンマ』を指標として、インド仏教徒はその数を徐々に増やしていった。

しかし、3000年の呪縛を振り払うのは容易なことではなく、憲法に謳われた不可触民制廃止は有名無実化し、仏教徒たちも強力な指導者を失いその勢いは停滞していった。

そんなインド、ナグプールの路上に、まことに不思議な因縁により一人の日本人僧侶が降り立った。ようやくの主役登場、佐々井秀嶺上人その人である。

佐々井上人、岡山県新見の人で、若いころから自らの生い立ち、性情に苦しんで人生の路頭を放浪し、東京での丁稚見習い、故郷での事業の失敗を経験し、本人語るところの色情因縁に悩み抜いて出家を志す。しかし、訪ね歩いた大本山は相手にしてくれず、自殺を試みた大菩薩峠から生還し、高尾山薬王院貫主山本秀順師の弟子となる。高尾山では山中で練行し、また旅に出て屋久島や乗鞍岳などに登り、禅門を叩き、日蓮宗の寺に修行して研鑽を積んだ。その間にも色情因縁は佐々

井師を苦しめ、その人生は落ち着きを見せなかった。新聞配達をしながら正大学の聴講生となり、日本の伝統宗派の教学を学ぶ傍ら、生来の浪曲好きが高じて仏教浪曲師として活躍し、また易者となって有楽町に店まで出した。

なにかと忙しい佐々井青年の人生に一石を投じたのは、師の山本秀順老師である。この弟子のあまりに破天荒な生き方は国内よりも、海外でこそ發揮されると、タイ留学を勧めたのであった。

師の勧告に従い、タイに旅立った佐々井師は、タイのワット・パクナム僧院でパクナム禅を習学し、またパーリ語を習得して原始仏典に親しんだが、僧院生活に物足りないものを感じ、さらにまたしても女性問題に悩んでタイにいられなくなり、いよいよその猛脚はインドへと向かうのであった。

仏蹟巡礼が目的で訪れたインドでは、ラージギルの霊鷲山と成りの多宝山上に世界平和大宝塔を建設中の日本山妙法寺、八木天撰上人のお世話になり、八木上人とともに大宝塔の建築作業に汗を流す。

日本山妙法寺とは、藤井日達上人が日蓮上人の西天開教（インドから日本

に伝来した仏法が、再びインドへと広まる）の教えを実行せんと、インド各地に建てたお寺で、団扇太鼓を叩きながら南無妙法蓮華経を唱題する撃鼓宣令、但行礼拝を専修する教団である。

佐々井上人も浪曲で鍛えた声で力いっぱい唱題し、八木上人の人柄にも惚れ込んで、一年間をラージギル大宝塔建設に打ち込んだ。しかし、建設現場で働くカーストに縛られたインドの人々と寝食を共にするに従い、自身の生き方に、この教団の中では収まりきれないものを感じて、大塔完成を前にしてラージギルを辞することにしたのであった。

その最後の夜、多宝山上の寺に八木上人と二人で泊り、本尊仏の前に布団を敷いて眠りについたところ、この一年間を振り返って様々な感慨に耽り、ますます目が冴えてきた。夜中の二時ごろのことであった。

突然左肩に衝撃を覚え、跳ね起きようとしたが身動きが取れず金縛り状態となった。ふと戸口に目をやると、そこには白髪白髭が肩まで垂れ白衣を着た巨軀の人物が右手に杖を、左手に巻物のようなものを持ち、その杖で佐々井師の左肩を押さえている。眼光炯々とした目を佐々井師に向けて、その人物は大音声の日本語で語りかけ

た。

「我は龍樹なり。汝速やかに南天竜宮城へ行け。汝の法城は我が法城。我が法城は汝の法城なり。南天鉄塔もまたそこに在り。」

なんとということか！



横で寝ていた八木上人を揺り起こして今起こったことを話しても取り合ってもらえず、まんじりともせず夜を明かした。翌朝、再び八木上人に向かうと、佐々井師は「南天竜宮城」とはどこにあるのかと問うた。「さてインドにそんなところがあったかな。竜はナーガ、宮城は……。ちよつと待ちなさい。それは本当か！」八木上人はパツと目を見開いて、インドの地図を持ってきた。そして、その地図のど真ん中を指さし「佐々井上人、あなたが言うことが本当ならば、竜宮城とはナグプールとなる。」と告げた。

アンベードカルが世を去って12

年後の1968年、佐々井上人は八木上人から喜捨された3百ルピーとわずかな身の回り品、日本山妙法寺の団扇太鼓と袈裟を詰めた頭陀袋を提げて、ナグプールの駅頭に降り立った。

これから一体なにをするのか、南天童宮城ははたしてここなのか、なにがなにやら分からぬままに、やってきたナグプール。何も無い。頼る人もいない。裸一貫からの出発である。よしそれならば、金もいらぬ、名もいらぬ、命もいらぬの三大誓願で、インドの民衆の直中へ徒手空拳飛び込んで行ったのだった。

当時のナグプールは、アンベードカルと共に改宗した仏教徒のほか、上位カーストのヒンズー教徒、イスラム教徒が町を三分していた。またガンディーを暗殺したといわれるヒンズー極右組織RSSの本拠地でもあった。これらの他宗教信者はアンベードカルの改宗が行われたことに少なからず反感を持っており、町のあちこちで小競り合いが起こっていた。

そんなこととは露知らず、佐々井上人、団扇太鼓を打ち鳴らし大声で題目を唱えて街中を歩き回った。なにやら珍妙な格好をした東洋人が来たというので初めのうちは面白がって見ていた人も、だんだんと興味を失って付

いてくるのは子供だけになり、イスラム教徒の居住区では石を投げられ、世話になっていた仏教徒の人からたしなめられる一幕もあった。

しかし、佐々井上人持ち前の明るさと気力で、徐々に地元の仏教徒とも打ち解けてきたころ、市内の大改宗広場（デイクシャ・ブーミ）でアンベードカルが改宗した10月14日を期して毎年行われる記念行事に、日本仏教を代表して（？）出席することとなった。

その日を目指してインド中から大勢の仏教徒が集結し、その数は何十万人にもふくれあがった。記念式典も終



盤に差し掛かったころ、突然司会者から何か一言でいいから演説してほしいと言われ、よしと引き受けたはいのもの、ラージギルの建設労働者から聞き覚えたヒンディー語ではなんと

も心もとないと、この仏教徒がことあるごとに言っている挨拶言葉を思い出し、これだけは自信たっぷりの大音声で「ジャイ・ブーム！」と三回連呼した。満場の観衆はその声に一瞬驚き、そしてジャイ・ブームを復唱し会場は熱狂に包まれた。なんぞ知らん。

この言葉は、ブームラーオ・ラームジ・アンベードカルの勝利（ジャイ）を称えるインド仏教徒の合言葉であったのだ。

そんなこんなで佐々井上人、たちまちにナグプール仏教徒の間で知られる人物となり、そして苦難の船出をして間もないインド仏教徒のかかえる様々な問題に、浪花節さながらの義侠心で取り組んでゆくのであった。

ここまで書き進んできたことは、壮大な佐々井上人の物語の一端に過ぎない。この後、インド中を歩き回って仏教改宗に尽力し、仏教徒の生活上に努め、またアンベードカル大菩薩（その死後仏教徒より菩薩号を諡られた）の事跡を学んでいよいよその意志を継ぎ、毎年10月14日の大改宗

式で大導師を務めるに至り、インド少数者委員会の仏教代表に就任するなど、まさしく獅子奮迅の活躍である。中でも、十数次にわたる大菩提寺奪還闘争は、佐々井上人の菩薩道の姿勢を象徴する運動であった。

また、ラージギル山上の霊告のもう一つのテーマである「南天铁塔」発見という使命を果たさんと、マンセル遺跡やシルプール遺跡の発掘、仏教文献の調査など、とにかくこんな小さな誌面では紹介しきれないほど、その活動は多岐にわたる。

そんな佐々井上人の大活劇を知りたくば、故山際素男氏の「破天」（光文社新書）を是非とも読まれることをお勧めする。この本は、普通の本ではない。佐々井上人の心、インド民衆の心、山際氏の心が混然一体となって著された大著である。一食二食抜いてでも、一日会社を休んでも、読むべし破天。必ずやあなたの心にも熱き菩薩道の火が燃え上がるであろう。

菩薩とは、菩提薩埵の略であり、ボーダイ（覚り）サットバ（衆生）覚りを目指す人々、要するに仏教徒という意味である。菩薩道とは、仏教徒の人生に他ならない。佐々井上人は、この菩薩道を愚直に歩まんとする。大菩薩峠からインドまで、長く険しい道なが

ら、切実に生きる人々衆生の息づく道である。かのブツダが、アンベードカル大菩薩が、歩いた道をまた佐々井上人が行く。ササイ、アゲボロ！（ササイに続け！）インド仏教徒は今、みんなで菩薩の大道を歩いている。

（平成24年2月15日『除暗遍明』）

佐々井秀嶺師関連書籍・映像



破天

インド仏教徒の頂点に立つ日本人

山際素男

光文社新書（2008年刊・600ページ） 定価（1400円＋税）

「不可触民の道」（絶版）で最も早く

佐々井師を日本に紹介した山際素男氏による佐々井師評伝の決定版。その生い立ちからインド仏教最高指導者となるまでの波乱万丈の半生を、インドに深く入って取材した筆者が情熱をこめて描く。佐々井上人とインド仏教徒の壮大なドラマ。



男一代菩薩道

インド仏教の頂点に立つ日本人

小林三旅

アスペクト（2008年刊・291ページ） 定価（1800円＋税）

2004年フジテレビで放映された

NONFIX『男一代菩薩道』の書籍化。

俺がやらなきゃ、誰がやる！不可触民解放と仏教復興に命を賭けて、インドで40年間戦い続ける佐々井上人の姿を描く渾身のノンフィクション。



必生 闘う仏教

佐々井秀嶺

集英社新書（2010年刊・200ページ） 定価（700円＋税）

2009年の44年ぶりの帰国後に

師の講話をもとに編集された普及版。必生、必ず生きる！煩惱は生きる力。

苦悩と流浪の果てにインドへ辿り着き、仏教に身を捧げた波瀾の半生と生の哲学、菩薩道を本人が語る。（高山龍智編）



DVD 男一代菩薩道

―神として万能にあらず―

小林三旅 監督

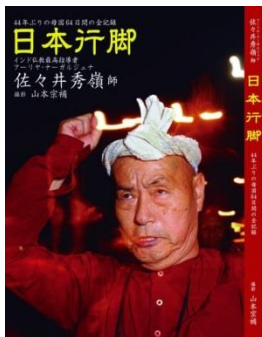
JVD（2014年発売・67分） 定価（3200円＋税）

ブツダガヤ、フクシマ、ナグプール。

インド仏教を牽引する現代の荒法師・佐々井秀嶺の生き様とは！

インドでの十年に及ぶ取材を敢行した映像作家・小林三旅による集大成。

2009年帰国時の山本宗補氏撮影



大型写真集「日本行脚」（改定定価1

0000円＋税）残部僅少ですが、佐々井秀嶺資料室にて販売しております。南天会事務局までお問い合わせください。

この他にも、インド仏教関係の本などに紹介されています。

フジテレビNONFIX『男一代菩薩道』1,2は、南天会ホームページにて視聴できます。

上記の本は、書店などでお求めください。南天会事務局にも少数在庫がございます。（別途送料がかかります。）

ナグプール旅行企画・個人旅行手配  
お気軽にご連絡ください。

 **株式会社 トラベル サライ**  
 大阪本社 フリーダイヤル 0120-408-128  
 〒541-0047 大阪府大阪市中央区淡路町 1-2-10  
 RRビル 3F  
 TEL: 06-6232-3012 FAX: 06-6232-3013  
 東京営業所 フリーダイヤル 0120-408-361  
 〒105-0013 東京都港区浜松町 1-12-5  
 アルファエイチビル 5F  
 TEL: 03-5777-6326 FAX: 03-5777-6327

世話人会・交流会

DVD上映会のお知らせ

9月15日(祝)午後3時

真成院本堂にて(無料)

東京都新宿区若葉2-7-8

電話03(3351)7281

「男一代菩薩道

―神とて万能にあらず―

上映後、第二回世話人会・交流会を開催します。(参加自由) 現地の状況報告、今後の活動について話し合います。会員以外の方も是非ご参加ください。



男一代菩薩道  
神とて万能にあらず

南天会現況(8月30日現在)

正式会員数 37名

会費・支援金総額 477,000円

賛同人(50音順)

岩佐澄隆(仏国土をつくろう会会長)

漆間宣隆(浄土宗浄土院住職・前岡山

県佛教会会長)

織田隆深(高野山真言宗真成院住職・

密門会会長)

小池一郎(株式会社マクシス・シンター

常務取締役)

高山龍智(佐々井上人お弟子)

富士玄峰(臨済宗・元ナグプール同友

会世話人)

宮淵泰存(日蓮宗妙光寺住職)

宮本光研(真言宗御室派元執行)

山本宗補(フォトジャーナリスト)

※当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、お名前を公表させていただきます。賛同いただける方は是非お申し出ください。 ※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。次回世話人会は、9月15日のDVD上映会後に行います。

南天会告知のお願い

事務局不如意のため、入会者数が未だ少ない状況です。是非周知の程よろしくお願いいたします。パンフレット等必要な方は、事務局までお知らせください。その他、ご提案等ございましたら是非ご連絡下さい。

会報『龍族』寄稿のお願い

当会々報は、年4回をめざして発行して参りたいと思います。会員それぞれの佐々井上人に対する思い、研究、インド訪問記など、是非ご寄稿下さい。原稿はメール、郵送等にてお送りください。皆様の声を取り入れた誌面にしていきたいと思えます。(原稿料等はお支払いいたしません)

佐々井秀嶺資料室

昨年3月より佐々井上人の所蔵する資料のアーカイブ化をめざし活動して参りました「佐々井秀嶺資料室準備委員会」は、南天会と事務局が同一であり、またより幅広い資料収集体制を確立するために、南天会と統合して内部団体とし、名称も「佐々井秀嶺資料室」となりました。尚、南天会と資料室は別会計とし、資料室へのご支援は別に受け付けております。

龍尾言

南天龍宮城ナグプール。そこはナーグの小川が流れる古代ナーガ族の首都だった。仏法を守護したナーガ族は、侵略者との争いを好まず、逃れ逃れて全世界に散らばった。

各地の人々と同化して、ひたすら守るは仏の教え。長い長い歴史の中で、国も人も変わりゆく。盛者必衰の理は、すでに平家が示すごとく、世界各国今むかし、何処の空にも当てはまる。その下で、悲嘆にくれる人びとと心と同じくした者が、皆の命を助けんと、地の底から湧き上がる。かくしてナーガの流民は、龍の民となり菩薩道を行く。ただ今その先頭をひたすら走るバンテージ。君も続け、我も行く。共に歩まん菩薩道。

そういう人びとを、合わせて「龍族」と呼びます。

(南天会事務局)  
〒7100004  
岡山県倉敷市西坂1582-1  
一心念誦堂内  
電話/FAX  
086(463)9391